

他者からの受容感が進路選択の取り組み意欲に与える影響 -時間的展望体験尺度を用いた検討-

学籍番号 18S2A003 氏名 角 由美子

モチベーション行動科学部 通信教育課程 指導教員 岩崎 智史 先生

キーワード：他者からの受容感 自己受容 時間的展望

問題と目的

人は生きている間、いくつもの重要な自己決定場面を経験する。その中の一つに「進路選択」がある。高校や大学卒業後の進路は、今後の人生に関わる重要な問題といえる。しかしながら、当事者である生徒・学生は必ずしも進路選択の取り組みを前向きに取り組んでいるとはいえない。進路選択を取り組み始める段階での「意欲」には、人生の重要な選択を、どのように受けとめるかが重要と推測され、当事者の受容する態度が影響すると考えられる。進路選択における取り組みへ踏み出すための「意欲」に与える要因として、自己受容感が影響していると考えられる。

自己受容感は一般的に、ありのままの自己を受け入れることであるが、自尊感情、自己肯定感、自己有用感など肯定的に自分を捉えるといった評価的な側面が含むものと（渡辺 2020）、自分自身に対する価値判断や、自己評価をせず、ありのままを受け入れる態度である「無条件の自己受容」（吉田・雨宮・坂入 2019）があり、評価を含む自己受容と区別している。「無条件の自己受容」は、理性感情行動療法において提唱された概念で、自発的な行動を生む原点であり、肯定的・否定的感覚などの自己評価を含む態度の前提要因として考えられる（渡辺 2020）。「進路選択などへ取り組む（踏み出す）意欲」は進路決定に向かう肯定行動を生む意欲であり、「無条件の自己受容」は取り組む意欲に影響すると推測される。また、「進路選択などへ取り組む（踏み出す）意欲」を、ポジティブ・ネガティブの2つの観点からみた場合、ポジティブな者は自己受容感が高く、ネガティブな者は自己受容感が低いと推測することができる。しかしながら、先述の通り、生徒・学生は進路選択の取り組みを前向きに取り組んでいるとはいえず、踏み出す「意欲」に影響すると推測される。「ありのまま（無条件）の自己受容」を持ち合わせている者は少ないと考えられ、その形成には、誰かに見守ってもらえているという安心感や、信頼してもらえている、何を決定しても受け入れてもらえるといった感覚・経験である、「他者からの受容感（経験）」が影響すると考えられる。

そこで、本研究では自己受容感を「自己評価を含まない、ありのままの自分を受け入れる態度」とし、他者からの受容感がありのままの自己受容感に及ぼす影響を明らかにする。さらに、ありのままの自己受容感が進路選択などの、重要な自己決定を行う取り組みへの意欲に影響するかを検討する。そして、他者からの受容感の有無が、取り組み意欲に影響するかを明らかにする。

方法

調査対象者 某私立大学に在籍の大学2年生から4年生にWEBによるオンラインアンケート調査（Google フォームを使用）を実施し、合計124名（男性43名、女性79名、不明2名）から回答を得られた。平均年齢は20.32歳（標準偏差1.36）であった。

使用尺度 「他者からの受容感」を測定するために、高井（2001）の「存在受容感尺度」を使用した。「ありのままの自己受容感」を測定するために、吉田・雨宮・坂入（2019）の

「無条件の自己受容尺度」を使用した。「進路選択などの重要な自己決定課題への取り組み意欲」を測定するために、白井（1994）の「時間的展望体験尺度」を使用した。「自尊感情」を測定するために、Miura & Griffiths（2007）の「日本語版 RSES」を使用した。

結果

はじめに、全変数の平均値と標準偏差を求めた。「他者からの受容感」（Mean=3.83, SD=0.96）、「無条件性」（Mean=3.83, SD=1.09）、「安定性」（Mean=2.57, SD=0.97）、「現在の充実感」（Mean=2.93, SD=0.87）、「目標指向性」（Mean=2.51, SD=0.98）、「希望」（Mean=2.94, SD=1.05）、「過去受容」（Mean=3.00, SD=0.95）、「自尊感情」（Mean=2.25, SD=0.95）であった。次に、各変数の相関係数を求め、全体的に各変数で正の相関がみられたが「目標指向性」と「過去受容」については無相関（ $r=.02, n.s.$ ）であった。各変数は、「目標指向性」と「過去受容」を除き関連があることが分かった。

「他者からの受容感」が「ありのままの自己受容感」に及ぼす影響を検討するために、「無条件の自己受容尺度」の2因子を従属変数、「他者からの受容感尺度」の1因子を独立変数としたそれぞれの回帰分析を行った。その結果、「無条件性」について $R_{adj}=.08$ であり、モデルは有意であった（ $F(1, 122) = 12.27, p < .01$ ）。標準回帰係数は $\beta = .30$ （ $p < .01$ ）で有意であった。また、「安定性」についても $R_{2adj}=.04$ であり、モデルは有意であった（ $F(1, 122) = 6.07, p < .05$ ）。標準回帰係数は $\beta = .22$ （ $p < .05$ ）で有意であった。「他者からの自己受容感」は「ありのままの自己受容感」に影響はあるものの、強い影響ではないことが明らかになった。また「他者からの受容感」が直接「進路選択への取り組み意欲」に影響するかを検討するため、「時間的展望体験尺度」の4因子を従属変数、「他者からの受容感尺度」1因子と「無条件の自己受容尺度」の2因子を独立変数とした、それぞれの重回帰分析を行った。その結果、「他者からの受容感」は直接「取り組み意欲（時間的展望体験尺度）」の「目標指向性」を除く3因子に影響することが明らかとなった（現在の充実感 $\beta = .30$ （ $p < .01$ ）、希望 $\beta = .22$ （ $p < .01$ ）、過去受容 $\beta = .16$ （ $p < .05$ ））。

考察

本研究では、他者からの受容感がありのままの自己受容感に及ぼす影響を明らかにし、他者からの受容感の有無が、取り組み意欲に影響するかを明らかにすることであった。「他者からの受容感」は「ありのままの自己受容感」の前提要因ではあるが、影響の弱さから、主要因ではなく複数要因の1つとして考えられた。また、時間的展望尺度にも直接影響していることから、「進路選択を一緒悩み、考えてくれる」など、自分の進路に対する直接の支援的な態度を「他者からの受容感」と捉えることも可能であり、進路選択へ取り組む意欲へ直接影響する要因であることも考えられ、「他者からの受容感」は「取り組み意欲」に対して「直接的」「間接的」に影響を与えていると言えるだろう。